

一、パウロとコリントの教会

コリントはギリシアの南部にあった都市で、パウロが第二回目の伝道旅行の際に立ち寄った所です。パウロはいつものように、安息日に会堂に入り、イエスがキリストであることを伝えました。そうしますと、ほとんどのユダヤ人たちはパウロの話を聞かず、反発しました。が、神をあがめる少数のギリシア人と、ユダヤ人で会堂管理者クリスポの一家が救われました。また、コリントの人々、すなわち異邦人が救われ、教会が形成されて行きました。紀元50年頃のことです。パウロはコリントに1年6か月滞在しました。したがって、コリントの教会員について、良く知るところとなりました。一方で、パウロは、コリントの教会員のことと相当に苦勞したようです。と言いますのは、コリントの教会員たちが「肉に属する人」だったからです。言い方を変えるなら、生まれながらの人、神から離れている性質を持った人たちだったからです。教会には、ねたみがあり、また分裂分派、闘争心、不品行がありました。要は、世の人々が持っている乱れが、そのまま教会に取り込まれていた状態です。そういう教会を、パウロはキリストの体として建

て上げて行こうとしたのですから、その苦勞は半端ではありませんでした。

二、賞を得られるように走る

パウロはコリントの教会を、キリストの御体として建て上げようとしていました。そういう気持ちで語っているのが、24節以降です。《競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。》とあります。コリントでは3年に1回スポーツの大会が行われていました。大会では、賞を受けられるのは一人だけでした。一位になった者だけが表彰され、それは、大変に名誉なことでした。それを指して、《あなたがたも賞を得られるように走りなさい。》と語っています。賞を得るのが、どれだけたいへんであるかは、コリントの人々もすぐに分かったはずで、アスリートたちは大会に向けて、ふつうの人間では耐えられないような努力を続けます。昔も今も同じです。なお、ここでパウロが語ったトラック（競走路）を走るレースは、今日の競技と同じです。ただし実際の競技は、賞を得るのが一人であったのに対して、私共の場合は一人でない点が異なります。さらに、私たちにとってのトラック（競走路）は、一生ものです。

死ぬまで続きます。若いときに信仰に燃えて、多くの人々から注目される存在になったとしても、晩年に信仰から離れてしまったら、賞は受けられませんが。

キリストを信じるとは、生涯にわたって主と共に歩む人生です。そうなるために、パウロは語っています。否、聖書は語っています。25節です。《競技をする人は、あらゆることについて節制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。》と。なお、「節制」は、御霊の実としても挙げられていますので（ガラテヤ5・22、23）、いちいち「あれをしよう、これをしよう。あれに気をつけなければならぬ。これに気をつけなければならぬ」と考えるよりも、御霊に導かれることをたいせつにしたら良いと考えます。そうするなら、喜びと聖霊の導きの下で、節制が身に付いているはずです。

三、目標を見据えて走る

26節を見てまいります。《ですから、私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません。》とあります。信仰を持つ者の目標は、何でしょうか。人と自分を救うことです。「人を救う」と申しましたのは、すべての人は罪を犯して、神の栄

光を受けることができません、キリスト・イエスによる贖いを通して、義と認められるからです（ローマ3・23、24）。また、「自分を救う」とは、主イエス・キリストの御姿に似ることが目標です。その際の最大の敵は、何でしょうか。それを語るためにパウロは、26節後半から別のたとえを語っています。《空を打つような拳闘もしません。》がそうです。たとえば、競走から拳闘に替わりました。理由は、27節に語られています。

《むしろ、私は自分のからだを打ちたいて服従させます。ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。》とあります。信仰生活における最大の敵は自分自身です。私たちが世にいる限り、気をゆるすと罪の芽が出てまいります。その場合の罪とは、神から離れている性質です。そこで語りました。《私は自分のからだを打ちたいて服従させます。》と。なお、《打ちたいて》と訳された元のことばの意味は「目の下をなぐる」です。すなわち、拳闘のたとえが続いているのです。では、拳闘の相手はだれだったのでしょうか。自分自身です。神の御意思に従わないように導く自分自身でした。そして、《服従させます》と訳されたことばは、「奴隷として曳いて行く」という意味です。パウロ先生がどういう覚悟で日々の生活を送っていたのかが、見えてまいります。